



Title	定家『文集百首』における句題の取捨態度
Author(s)	黄, 夢鴿
Citation	詞林. 2021, 70, p. 43-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85124
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

定家『文集百首』における句題の取捨態度

黄 夢 鶴

一、はじめに

『文集百首』は建保六（一二一八）年に慈円が『白氏文集』の中から選んだ百の句題に従って詠んだ句題和歌であり、四季や恋・山家・述懷など十一の部立から構成されている。同年中に定家も慈円の勧めに応じて、慈円とはほぼ同じ句題で百首の歌を詠んだ。

句題和歌は漢詩句を題として詠む和歌で、寛平六（八九四）年に成立した『大江千里集』を先蹤とする。後に『高遠集』や『匡房集』、『朗詠百首』、『文集百首』などがあり、近世にも詠まれた。

『文集百首』以前の句題和歌は主に漢詩句一句を題とし、その題を中心に詠んでいる。それに対し、『文集百首』の句題は二句以上のものが多く、佐藤恒雄氏によって次の表のよう

	一句題	二句題	四句題	六句題	計	
慈円百首	12	73	14	1	100	
定家百首	26	63	10	1	100	

表に示すように、慈円歌と定家歌は主に二句以上の漢詩句を題としている。定家の『文集百首』の歌は慈円が選んだ七十三の二句題のうち、十三題が一句題に変わり、四句題の一つが一句題に、三つが二句題に変わった。

また、慈円歌と定家歌の詠法については、次のような例が見られる。

残影灯閉牆、斜光月穿牖

（秋・三三）

秋の夜は壁にともし火消えやらで窓にかたぶく月ぞかなしき
（慈円）

わがしたふ人はとひこず窓ごしに月さしいりて秋風ぞ吹
（定家）

慈円歌は句題の一句目を「秋の夜は壁にともし火消えやらで」、二句目を「窓にかたぶく月ぞかなしき」と言い換え、句題の二句をすべて詠み込んでゐる。それに対し、定家歌は窓から差し込んだ月の光を詠み、句題の二句目だけを取り入れてゐる。

このように、定家歌には慈円の選んだ句題の句が一部省かれたものは十六例もある。さらに句題を丹念に詠む先行句題和歌及び句題をすべて詠み込もうとする慈円歌に対し、定家歌では、慈円の選んだ句題がそのまま示されているのにもかかわらず、一部の句だけを詠む場合もある。それについて、佐藤氏は以下のように述べている。

二つながら意味をもつ対句を三十一字の中に詠み入れることは、きわめて困難であるにもかかわらず、慈円はさして困惑することもなくそれをやつてしまふ。その点、定家は一句だけを丹念に詠んで、やすらかな歌を詠みえた。というより、その点を顧慮した上で、与えられた二句のうち一句を捨てたのではないかと思われる。

つまり、佐藤氏は、内容の多い対句を三十一字の和歌に詠み込むことが難しいため、定家は与えられた対句の一句だけを詠んだと推測している。しかし、定家歌がどのような句題を詠んでいるのか、どのような句題を詠んでいないのか、さら

に各句題の句がどのような基準で取捨選択されたのかについては詳細に検討していない。加えて、句題の句を一部だけ詠むもののみならず、定家歌には二句以上の句題の句をすべて和歌に詠み込む例もある。二句以上の句題をすべて和歌に詠み込む場合、その句題にはどのような特徴があるのかということに関しても更なる検討が必要だと考えられる。

また、対句とは、韻律や意味などで対照的な語句を並列させるものである。対句を題として和歌を詠む際、その対照的な内容を一首に詠み込むことは難しいと考えられる。『文集百首』の句題には対句であるものが多く見られるため、定家歌における句題の取捨態度を考察する時に、対句の観点から考えることも重要であろう。

そこで、本稿では、まず定家歌を一句題・二句題・四句題・六句題に分けてそれぞれ分析し、その詠法を検討する。次に二句題に注目し、「句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合」と「句題の一句だけを和歌に詠む場合」と比較する。そして、対句や題、歌材などから各場合の句題の特徴を検討し、定家がどのような基準で句題の句を取捨したのかを明らかにする。

二、定家歌の詠法について

定家歌は、一句題・二句題・四句題・六句題の場合に分けられる。本節ではそれぞれの詠法を検討する。まず、一句題の例を考察する。

黄梢新柳出城牆

（春・四）

この里のむかひの村のかきねより夕日をそむる玉のを柳
（定家）

定家歌は句題の「城牆」を「この里のむかひの村のかきね」、「新柳」を「玉のを柳」と詠み、「出」を「（かきね）より」で表現している。また、「黄梢」を「夕日をそむる」と詠み、黄色い柳の色合いが夕日を染める情景を描写している。佐藤氏が述べるように、「一句のみを詠じる場合特に、定家は一般の結題詠法に極めて近い位置」にあり、句題を丹念に詠んでいる。

次に、二句題の例について検討する。この場合は、「句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合」と「句題の一句だけを和歌に詠む場合」とに分けられる。

「句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合」の例として、次の和歌が挙げられる。

逐処花皆好、随年貌自衰

（春・七）

宿ごとに花のところはにほへども年ふる人ぞ昔にも似ぬ
（定家）

句題の「逐処」は「宿ごと」に、「花皆好」は「花のところはにほへども」と言い換えられている。句題二句目の「随年貌自衰」は「年ふる人ぞ昔にも似ぬ」、つまり年月を送っている人は昔とすっかり面変わりしてしまっていると間接的に詠んでいる。

「句題の一句だけを和歌に詠む場合」は（慈円の選んだ句題を一部省いて示す場合）と（慈円の選んだ句題をそのまま示しているが一句だけを詠んでいる場合）との二つに分類できる。例えば、次の例が見られる。

歳時春日少、世界苦人多

（春・一二）

暮れて行春は霞の色ながらあやしく濡る、人の袖かな

（慈円）

歳時春日少

いたづらに春日すくなき一年のたがいつはりにくる、菅の根
（定家）

慈円歌が句題の二句をすべて和歌に詠み込んでいる。それに対し、定家歌では慈円が選んだ句題の二句目が省略され、一句目だけが題として丹念に詠まれている。

さらに、赤羽淑氏が指摘するように、慈円の選んだ句題の一部を切り捨てて詠む例以外、「定家には慈円が選んだ句題を切り捨てない場合でも、与えられた句題二句のうち一句を省くか、一部を省略して歌に詠む場合」もある。例えば、

月隠雲樹外、螢飛廊宇間

（秋・三四）

しぐれ行雲のこずゑの山の端に夕たのむる月もとまらず
（定家）

がある。句題の一句目の「月隠」は「夕たのむる月もとまらず」、「雲樹外」は「雲のこずゑの山の端に」と詠んでいる。しかし、句題二句目の「螢飛廊宇間」は詠み込まれていない。

これと同様の詠法として、次の例がある。

相思夕上松台立、蜚思蟬声滿耳秋（秋・三〇）

夕ぐれは物思ひまさる蜚身をかへてなくうつせみの声

（定家）

句題の「相思」は「相思ひ」、「夕」は「夕ぐれ」、「蜚思」は「物思ひまさる蜚」、「蟬声」は「なくうつせみの声」で詠んでいる。つまり、句題二句目の「蜚思蟬声滿耳秋」は和歌に詠み込まれており、さらに一句目の「相思夕」も詠まれているが、「上松台立」は取り入れられていない。

このように、二句題で詠まれた定家歌には、句題を二句とも詠み込むものもあるが、句題の一句だけを中心に詠む場合も少なくない。

そのほか、四句題と六句題は主に「述懐」や「法門」、「閑居」、「無常」などの題とされている。

尽日坐復臥、不離一室中

中心本無繫、亦与出門同

（閑居・七〇）

あくがるる心ひとつぞさしこめぬまきの板戸のあけく
る、空（定家）

句題は「一日中座つたり臥したりして、一つの部屋の中を離れない。心が何物にも束縛されていないから、部屋に閉じこもっても門外に出るのと同じだ」と詠んでいる。定家歌は句題の言葉を一つずつ詠みかえるのではなく、「あくがるる心ひとつぞさしこめぬ」で句題をまとめて詠んでいる。

「無常」「法門」などの長い句題は抽象的な内容を詠むものが多い。佐藤氏が述べるように、定家といえども文字に忠実に詠歌することが不可能であり、複数句が表現している意味としての思想内容や概念を翻案するという方法を取らざるを得なかった。⁶ 四句以上の句題は二句題と異なる姿勢を示しているため、本稿では二句題を中心に取り上げ、四句以上の句題については稿を改めて詳細に検討したい。

では、定家歌は句題のどのような部分を詠んでいるのか、どのような部分を詠んでいないのか、それぞれどのような特徴を持つのか。以上の問題を考察するために、次節から二句題に注目し、「二句をすべて和歌に詠む場合」と「一句だけを詠む場合」と比較する。そして、題や歌材、対句などから各句題の特徴を分析し、定家歌における句題の取捨選択基準を考察する。

三、二句題の二句をすべて詠む場合

本節では、句題の二句をすべて詠み込む定家歌を取り上げて検討する。まず、四季題の例を以下に掲げる。○は「句題は対句」、×は「句題は非対句」であることを示す。

① × 今日不知誰計会、春風春水一時来（春・一）

氷とくもとの心やかよらん風にまかする春の山水

② × 遙見人家花便入、不論貴賤与親疎（春・八）

はるかなる花のあるじの宿とへばゆかりもしらぬ野べの

若草

③ × 留春春不留、春婦人寂寞（春・一四）

うらむとてもとの日数のかぎりあれば人もしづかに花もとまらず

④ × 厭風風不定、風起花蕭索（春・一五）

春のゆき梢の花に風たちていづれの空をとまりともなし

⑤ × 微風吹袂衣、不寒復不熱（夏・一六）

たちかふるわが衣手のうすければ春より夏の風ぞすゝしき

⑥ × 可是禪房無熱到、但能心靜即身涼（夏・二二）

嵐山すぎの葉かげの庵とて夏やはしらぬ心こそすめ

⑦ × 夏臥北窓風、枕席如涼秋（夏・二五）

宿からにせみの羽衣秋やたつ風の手枕月のさ蓮

⑧ × 夜来風雨後、秋氣颯然新（秋・二六）

夜の雨のこゑ吹のこす松風に朝けの袖は昨日にも似ず

⑨ × 大底四時心惣苦、就中腸断是秋天（秋・二八）

さくら花山郭公雪はあれどおもひをかざる秋はきにけり

⑩ ○ 八月九月正長夜、千声万声無終時（秋・二九）

長月をまつよりながき秋の夜のおくるもしらず衣うつ声

⑪ × 不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天（秋・三八）

苔むしろもみち吹きしく夕時雨心もたへぬ長月の暮

⑫ ○ 葉声落如雨、月色白似霜（秋・三九）

声ばかり木の葉の雨は古郷の庭もまがきも月の初霜

⑬ × 策策窓戸前、又聞新雪下（秋・四三）

初雪の窓の呉竹ふしながらおもるうれ葉の程ぞ聞ゆる

⑭ × 爐火欲消灯欲尽、夜長相對百憂生（冬・四四）

暁は影より行灯にながき思ひぞひとり消えせぬ

⑮ × 唯有数叢菊、新開籬落間（冬・四五）

咲く花の今はの霜におきとめてのこるまがきの白菊の色

⑯ × 寂寞深村夜、残雁雪中聞（冬・四七）

里とはき園の村竹ふかき夜の雪の雲間をわたる雁金

⑰ × 望春春未到、応在海門東（冬・四八）

清見渇あけなんとする年波の関戸の外に春や待らん

「×」と「○」の数から分かるように、二句題をすべて和歌に詠み込む場合の題はほとんど対句ではない。先に述べたように、対句は対照的な内容を詠むものが多い。では、対句ではない句題はどのような特徴があるのだろうか。

①の句題は「立春の今日、どこの誰が計算して春風と春水を同時にもたらしたのだろう」という意味である。和歌では、句題の一句目を上句「水とくもとの心やかよふらん」、二句目を下句「風にまかする春の山水」と詠んでいる。句題における「春風春水」は春歌によく詠まれるものであり、また句題二句目の「春風春水一時来」は一句目の「計会」する内容となっている。句題の二句は文脈的に繋がっている。

②の句題は「遙かに人の家を見て花が咲いていればすぐに入り、貴賤親疎は問題にしない」という意味を表す。和歌は

句題の一句目を「はるかなる花のあるじの宿とへば」、二句目を「ゆかりもしらぬ野べの若草」と間接的に詠んでいる。句題の一句目は「花」という春歌の代表的な素材を詠んでおり、また二句目と内容的に深く関連している。

③の句題は「春を引き留めようとしても春は留まってくれない。春が帰ってしまうと、人は物寂しくなってしまうものだ」と詠んでいる。和歌は句題の一句目を「うらむとてもとの日数のかぎりあれば」、二句目を「人もしづかに花もとまらず」と言い換えている。句題の一句目では、春を留めても留まらなと言つて、二句目は春が帰つて人が寂しくなると詠んでおり、春が留まらないからこそ、春が帰つて人が寂しくなるといふに上下の句は因果関係を持っている。また、和歌では「あれば」という表現で上句と下句を繋げ、句題のように因果関係を示している。

④の句題の一句目は「風を嫌つても風は静まらない」と詠み、二句目は「風が吹きおこると忽ち花は散つて寂しくなつた」と詠む。一句目の止まない風は二句目の花が散る原因となる。④の句題は③と同様に、両句には因果関係がある。

⑤の一句目は「微風が袷衣を吹いて」、二句目は「寒くもなく暑くもなく快い限りだ」と詠んでおり、一句目の微風は二句目の寒くもなく暑くもないと感じる理由になる。

また、⑥の句題は、一句目は「禪室には暑さが押し寄せないわけではない」と詠み、二句目は「ただ心を静かに澄ませ

ていれば、そのまま身も涼しくなるのだ」と説明しており、文脈的につながっている。

⑦⑧の句題も同じように、一句目は二句目の原因になる。

⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯の句題の詩句はいずれも対句ではなく、詩句間の文脈がつながり、内容的に深く関連している。

⑩と⑫の句題は対句であるが、⑩の一句目の「長夜」と二句目の無限な衣を擣つ声を表す「無終声」とは秋夜の擣衣の情景として、漢詩と和歌によく一緒に詠まれるため、二つの詩句は深い関連を持っている。⑫の句題も対句であり、一句目は雨の降る声に聞こえる「落葉声」を、二句目は霜のように白い月を詠んでいる。和歌においてこの二つの情景が同時に詠まれることは稀だが、定家は降雨の「降る」と古郷の「古」に掛かる「古郷」で両者をつなげ、工夫して詠んでいる。例外的なものと言える。

このように、二句題をすべて詠んでいる定家の四季歌の句題はほとんど対句ではなく、詩句間の文脈がつながっている。さらに、四季題以外の二句題も四季題と同じ傾向がうかがえる。例えば、

⑱ ○ 但有双松当砌下、更無一事到心中 （閑居・六六）
わが宿の砌にたてる松の風それよりほかはうちもまぎれず

が挙げられる。句題は「階段のもと石畳に二本の松が生えているばかりで、何一つ心に掛かるものはない」という意

味を表し、二句の内容がつながっている。和歌では、句題の一句目を「わが宿の砌にたてる松」、二句目を「松の風それよりほかはうちもまぎれず」と言い換えており、句題の二句をすべて詠み込んでいる。句題の二句は内容的に関連しているため、二句とも和歌に取り入れられたのであろう。

また、次の例もある。

⑮ × 身心一無繫、浩々如虚舟 （述懐・八二）

浦風や身をも心にまかせつ、ゆくかたやすき海人の釣舟
句題は「身心ともに何の束縛もなく、自由に漂うのはまるで波に揺られて漂う舟のようだ」と詠んでいる。定家歌は一句目の「身心一無繫」を「身をも心にまかせつ、（ゆく）」、二句目の「浩々如虚舟」を「ゆくかたやすき海人の釣舟」と詠みかえている。句題の二句が内容的に深くかわっているため、定家歌は句題の句をすべて詠んだのであろう。

四季題以外の二句題には、上記のような例以外、次の特殊な例も見られる。

⑯ × 我有一意君記取、世間自取苦人多 （述懐・七九）
世中
いとまなき海人の釣縄うちはへてうきもしづみもあはれ

⑳ 句題は「私は君に一つ言いたいことがあるので、覚えておいてください。それは、世間には自分から苦しみを招き入れる人が多いということだ」という意味を表し、二句目の「世間自取苦人多」は一句目の「君」に「記取」してほしい「一

意」の具体的な内容を指す。一句目は露わに詠まれていないが、その具体的な内容を表す二句目が和歌に詠まれることによつて表現されているのだらう。このように、一句目の内容が間接的に詠まれていると考えられる例も存在する。

先に述べたように、二句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合、句題はほとんど対句ではない。また、句題の詩句間は文脈がつながっており、内容的に深く関連しているものが多く、因果関係を持つものもある。文脈がつながっているからこそ、句題が二句あっても、その詩句がすべて和歌に詠み込まれたのであろう。それに對し、対比的な内容を詠む対句の世界は一首の和歌に詠みにくかったと考えられる。それについては、次節以降検討する。

四、二句題の一句だけを詠む場合

定家歌における二句題の一句だけを詠む場合は、〈慈円が選んだ二句題の一句が省略される場合〉と、〈慈円が選んだ句がそのまま示されているが一句だけを詠む場合〉がある。次にそれぞれの場合について検討する。

四―一、慈円が選んだ二句題の一句が省略される場合
前述したように、定家歌には慈円の選んだ句題が一部省略され、残りの一部だけが詠まれる場合が一六例ある。本項では二句題の例を取り上げ、どのような句が省かれたのか、残

された句がどのような特徴を持つのかを検討する。先述したように、○が対句で、×が非対句となる。したがって、1・7・11・12の句題は対句で、8・10は対句ではない。

（※）内は定家の『文集百首』に示されている句題

1 ○落花不語空辞樹、流水無心自入池（春・一〇）
山吹の色よりほかにさく花もいはでふりしく庭の木のものと

2 ○歳時春日少、世界苦人多（春・一三）

いたづらに春日すくなき一年のたがいつはりにくる、菅の根

3 ○残鶯意思尽、新葉陰涼多（夏・一七）

陰しげき檜の葉がしは日にそへて窓より西の空ぞ少き

4 ○池晚蓮芳謝、窓秋竹意深（夏・一九）

風わたる池の蓮に夕月夜人にぞあたるかげも匂ひも

5 ○風生竹夜窓間臥、月照松時台上行（夏・二〇）

風さやぐ竹のよなかにふしなれて夏にしられぬ窓の月哉

6 ○团扇先辞手、生衣不着身（秋・二七）

はしたかを手ならず比の風たちて秋の扇ぞ遠ざかり行

7 ○黄茅岡頭秋日晩、苦竹嶺下寒月低（秋・三三）

たれもさや心の色のかはるらむ岡の浅茅に夕日さすころ

8 ×前頭更有蕭条物、老菊衰蘭兩三叢（秋・三七）

ふちばかま風のくだく紫に又しら菊の色やならはん

9 ×香火一爐灯一盞、百頭夜礼仏名経（冬・五〇）

年ふればわが黒髪も白糸のよるは仏の名をとなへつ、

10 ×夜深方独臥、誰為払塵床（恋・五一）

あはれてぬ払はば袖のうき身のみあはれいくよの床の

浦風

11 ○蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中（山家・五八）

しづかなる山路の色の雨の夜に昔恋しき身のみふりつ、

12 ○挿柳作高林、種桃成老樹（旧里付懷旧・六三）

なほざりにさし柳の一枝や日影こだかき夕暮の色

1の句題は「落花は昔のことを何も語らないでいたずらに枝から離れ散り、流水は何の心もなくひとりでに池に流れ入るばかりである」という意味を表す。定家歌は句題の一句目だけを示し、句題の「花」をそのまま詠み、「落」を「ふりしく」に詠みかえ、「不語」「空辞樹」を「いはでふりしく庭の木のこと」で詠んでいる。句題の二句は、一句目は落花、二句目は流水について詠んでいる対句で、異なるものを詠じている。また、落花が春歌の素材としてよく詠まれるのに対し、流水からは季節感が読み取れない。そのため、二句目が捨てられたのではないかと考えられる。

2の句題は「一年の内では春の日が最も短く、世間には苦悶する人が極めて多い」ことを表す。和歌では、句題の「歳時」を「一年」、「春日少」を「春日すくなき」と詠んでいる。また、万葉以来の「昔の根の長き春日」という春の日の長さを強調する句を踏まえ、春の日が長いというのは偽りだと詠

み、春の短さを強調している。このように、定家歌では一句目だけが句題として詠まれている。慈円が選んだ元々の句題も対句で、一句目は春日の短さ、二句目は苦境にいる人の多さについて言っており、異なる世界を詠んでいる。春歌一五首の一三首目として、春日の短さを惜しむ一句目「歳時春日少」は二句目より題にふさわしい。そのため、一句目が省略され、二句目が残されたのであろう。

3の句題の一句目は春歌にも詠まれる「残鶯」、二句目は夏に出る「新葉」を詠んでいる。4の一句目は平安後期から夏の叙景歌に詠まれるようになった「蓮」、二句目は「窓秋」を詠っている。5の一句目は涼しい緑陰をもたらしものとしてよく用いられる夏の「竹」、二句目は季節が分からない「松」を詠み込んでいる。いずれも「夏」の題に合わせて句題の一部だけが選ばれたのだらう。

6の一句目は「秋の扇」を思い出させる「団扇」、二句目は夏の衣を表す「生衣」を詠んでいる。7の句題は一句目が「秋日」を詠んでいるのに対し、二句目が「寒月」という初冬を表す言葉を用いている。それぞれ、より「秋」という題にふさわしい句だけが採用されたのだと考えられる。

8の二句目は一句目より具体的な風物を詠んでおり、秋の景物とされる「菊」も使用している。そのため、一句目が省かれ、より題に適切な二句目が題とされたのであろう。

9は『和漢朗詠集』「冬・仏名」の冬歌末尾に収録されて

いる。歳暮の行事として仏名会を詠み、さらに仏名経を唱えるのが「白頭」（老人）であることから、「白頭夜礼仏名経」は歳暮嘆老の題として機能している。そのため、季節の分らない一句目が捨てられ、一二月（冬）に行われる仏名会を詠む二句目が句題として選択されたと考えられよう。

10は句題一句目の「夜深方独臥」が切り捨てられているものの、定家歌では「うき身のみあはれ」でそれを詠んでいるすなわち、定家歌では二句目だけが句題として示されているが、慈円が選んだ句題二句をすべて詠み込んでいるのである。内容から考えると、句題の二句は対句ではなく、二句とも一人寝の寂しさを詠み、文脈的に深く関わる。先に検討した「二句題の二句をすべて詠み込む場合」のように、句題の二句は関連性があるため、二句とも歌に詠まれていると考えられる。11の一句目は長安で得意な時を過ごしている友、二句目は草庵で寂しく住んでいる自分の生活を詠んでいる。ここでは題の「山家」に合わせて二句目が句題とされたのだらう。

12は対句の形で、一句目の「柳」と二句目の「桃」は共に春の物として詠まれるが、「柳」は旧里と一緒に詠まれることがあるため、一句目が句題とされたかと思われる。

以上の考察により、慈円の選んだ二句題の一句が省略される場合、句題のほとんどが対比的なものを詠んでいる対句の部分である。また、部類（季節・テーマ）に外れた句が詠まれていることから、定家歌の句題は部類や題に合わせて慈

円の選んだ句題から選択されたものと考えられる。

四―二、示された二句題の一句だけを詠む場合

次に慈円の選んだ句題をそのまま示しているが、その一部だけを和歌に詠み込む場合について検討する。二句題の例を以下に挙げる。

（※）傍線部は定家が和歌に詠み込んでいる句題を示す

13 × 蕭索風雨天、蟬声暮啾々（夏・二四）

空蟬の夕のこゑはそめかへつまだ青葉なる木々の下陰

14 ○ 残影灯閉牆、斜光月穿牖（秋・三三）

わがしたふ人はとひこず窓ごしに月さしいりて秋風ぞ吹

15 ○ 月隱雲樹外、螢飛廊宇間（秋・三四）

しぐれ行雲のこずゑの山の端に夕たのむる月もとまらず

16 ○ 幻世春來夢、浮生水上漚（無常・九三）

淵となるしがらみもなき早瀬川うかぶみなわぞ消えてか

なしき

13の句題は「空に物寂しく雨が降り、風が吹いて、蟬の鳴き声が夕暮れにはたくさん聞こえる」と詠んでいる。和歌では句題二句目だけに絞って詠んでいる。「蟬声暮啾々」は「空蟬の夕のこゑ」に言い換えられ、蟬の声が「まだ青葉なる木々の下陰」を「そめかへつ」で、蟬の声によって晩夏から初秋への移り変わりを表現している。ここでは、句題の一句目は季節が分かるものを詠んでおらず、二句目は夏の歌によく詠

まれる「蟬の声」を詠んでいる。題の「夏」に合わせて二句目だけが詠まれたと考えられる。

14の句題は「消えなかった灯火の光が垣に閉ざされ、傾いた光を放つ月が窓に差し込んでくる」という意味を表す。句題の一句目は「秋夜長 夜長無眠天不明 耿耿残灯背壁影 蕭蕭暗雨打窗声」という「上陽白髮人」詩の表現に似通い、壁に映じる残灯は秋の夜に孤独に過ごす長い夜の情景としてよく詠まれ、閨怨の要素が強い。二句目も閨怨を表すことがあるが、月は秋の景色としてもよく詠まれる。定家歌は本歌「窓越しに月射し入りて足引のあらし吹く夜は君をしぞ思ふ」（万葉集・一一・二六八七）を取り入れ、恋のイメージを漂わせているが、歌材から考えると、秋の題として、「月」を詠む二句目は「灯」を詠む一句目よりふさわしいと考えられよう。

15の句題二句目は夏の題としてよく詠まれる「螢」を詠んでいるため、定家はそれを捨てて、秋の「月」を詠む一句目だけで和歌を詠んだのであろう。

このように、句題二句がそのまま示されているが、その一句のみを詠む四季歌も、題に合わせて句題の句が取捨されているのである。

16の句題は対句であり、「春來夢」「水上漚」という二つのもので題の無常を表現しているが、和歌では句題二句目の「浮生水上漚」だけを中心に詠んでいる。その理由については『文

『集百首全釈』で以下のように指摘されている。⁷⁾

句題一句目の「春來夢」は和歌では「春の夢」「春の夜の夢」と詠み、それらの詞は艶麗なイメージから恋の歌に多く詠まれる。（中略）定家は恋歌のイメージを避けて、句題から読み取れる無常観を強調するためにあえて「幻世春來夢」を詠まず、「浮生水上漚」に重点を置いて詠作したと思われる。

すなわち、句題一句目には恋の歌によく詠まれる「春來夢」という表現があるため、題にふさわしい一句目が捨てられ、無常を強調する二句目だけが詠まれたということだろう。

このように、示された二句題の一句だけを詠む場合も、慈円が選んだ句題の一部が省略される場合と同様に、題に合う句題の句が選ばれて和歌に詠まれたと考えられる。

本節の考察により、二句題で詠まれた定家歌では、対比的な内容を詠む対句が一首の和歌に詠みにくいため、句題二句の一句が省かれたと考えられる。そして、定家歌は部類のテーマに外れた句を詠まず、それに合う句を和歌に詠み込んだ。

五、おわりに

『文集百首』の定家歌における句題の取捨態度について二句題を中心に考察した。『文集百首』において、句題の句をすべて和歌に詠み込もうとする慈円歌に対し、定家歌は、一句題の場合は基本的に句題を中心に詠んでいるが、二句題の

場合だと、「句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合」のみならず、「句題の一句だけを詠む場合」もある。定家歌の句題はどのような基準で取捨されたのかを検討するために、題や素材、詩句間の関連などから、各句題の特徴を分析した。

以上の分析により、「句題の二句をすべて和歌に詠み込む場合」の句題はほとんど対句でなく、詩句間が内容の関連或いは因果関係を持つているため、和歌にすべて詠み込まれたことが分かった。「句題の一句だけを詠む場合」の句題は対照的な内容を詠む対句が多く、主に和歌の題や部類に合わせて取捨選択されたことを明らかにした。

そして、先に述べたように、定家歌では慈円が選んだ句題の一部が省略される場合がある。その句題の句を省いたのは慈円なのか定家なのかについては未だに定説がない⁸⁾。ただ、本稿で明らかにした定家歌の句題の取捨基準は、この点を考えるヒントになる。定家歌にはA句題の一部が省かれても詩句間に深く関わる慈円が選んだ句題の句をすべて詠む場合（四―二の例10）と、B句題の句がすべて示されても、題にふさわしくない句を詠まない場合（四―二の例13・14・15・16）とがある。第三節で考察したように、定家は詩句間に深く関連する句題をすべて和歌に詠み込む姿勢を持っている。そのため、定家自身で句題を選択したのであれば、Aのような場合が存在するのは不自然である。さらに、第四節で明確にしたように、定家歌は題に合わせて句題の句を選ぶ姿勢がうかがえる。

ゆえに、定家は自分で句題の取捨選択ができれば、Bのような和歌に詠まない句題を省略するのが自然であろう。だとすれば、句題は慈円から送られてきたものであり、定家は和歌を詠む時に句題を変えることができなかったため、やむを得ずAとBのような詠法をしたと考えられるのではないか。本稿では二句題を中心に取り上げたが、今後は四句題・六句題についても詳しく検討する。

注

(1) 「崇徳院句題百首」や『拾玉集』所載「句題百首」のように、四字組題・結題を「句題」と称する例もあるが、本稿では漢詩句を題とする和歌のみに注目する。

(2) 佐藤恒雄「『文集百首』の慈円と定家」、『藤原定家研究』、風間書院、二〇〇一年／初出「詩句題詠における二つの態度——『文集百首』の慈円と定家」、『中世文学と漢文学Ⅰ』（和漢比較文学叢書第五巻）、汲古書院、一九八七年

(3) 同注2

(4) 同注2

(5) 赤羽淑「定家の文集百首上」、『ノートルダム清心女子大学紀要（国語国文学編）』巻二一一、一九八七年三月

(6) 同注2

(7) 『文集百首全釈』（文集百首研究会、風間書房、二〇〇七年・九三番歌【評】に拠る）。

(8) 佐藤恒雄氏は、句題の句を一部省いたのは誰なのかについて、

次の二つの可能性を指摘している。（建保六年「文集百首」の成立）、『藤原定家研究』、風間書院、二〇〇一年／初出「建保六年『文集百首』の成立」、『中世文学研究』創刊号、一九七五年七月）・『拾遺愚草員外雑歌』の本文が不完全なのであって、定家は実際に慈円と同じ句題で詠んだことになる。

・もとより、慈円が自分で詠んだ詩句と、定家のもとに送った詩句とが、最初から異なっていた可能性もなくはない。慈円が実際に自分で詠んでみて、その手ごたえによって、特に長きにすぎるような題を、一部省いたかたちで定家の許に送ったかもしれない、と考えられなくもないからである。

つまり、定家歌の本文が不完全である可能性もあり、慈円が先に句題を省いて定家のもとに自分と異なる句題を送った可能性もあるとされている。

【引用本文】

本稿に引用する慈円・定家の『文集百首』の歌はそれぞれ『拾玉集』（石川一・山本一著、和歌文学大系、明治書院、二〇〇一年）・『藤原定家全歌集下』（久保田淳校訂・訳、ちくま学芸文庫、二〇一七年）に拠る。それ以外の和歌は新編国歌大観、白居易の詩は新釈漢文大系『白氏文集』（岡村繁、明治書院、一九八八～二〇一八年）から引用した。また和歌と漢詩を引用する時に適宜濁点を付け、仮名を漢字にあて、旧字体を新字体に直した。

（い）う・む（い）う 本学大学院博士後期課程）